

氏 名	渡邊 美保
学 位 の 種 類	博士(看護学)
報 告 番 号	甲第 79 号
学 位 記 番 号	看博第 30 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 29 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	高齢者のリロケーションを促進する看護介入 Nursing Intervention to Improve Elderly Patients Relocation from Hospital
論 文 審 査 委 員	主査 教授 野嶋 佐由美(高知県立大学) 副査 教授 池 添 志 乃(高知県立大学) 教授 竹崎 久美子(高知県立大学) 教授 森 下 安 子(高知県立大学)

論文内容の要旨

目的：本研究は、高齢者のリロケーションを促進する看護介入を明らかにすることである。

方法：研究協力者は、過去 1～2 年の間に高齢者のリロケーションに関わったことがあり、臨床経験 5 年以上の看護師を対象とした。面接は半構造化面接を用いて行い、リロケーションを促進する看護介入について質的記述的分析を行った。本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

結果：研究協力者は、6 施設に勤務する老人看護専門看護師、脳卒中リハビリテーション看護認定看護師、地域連携室看護師、病棟看護師の 30 代前半～40 代後半の看護師 14 名であり、14 名から語られたケースは、15 ケースであった。分析の結果、高齢者のリロケーションを促進する看護行為として 30 の看護ケア群が語られ、さらに洗練化し、分析した結果 13 の看護ケア行動が抽出された。すなわち、《ここに来てよかったという実感を高める》《自分好みの場に創造することを支える》《余計な気をつかわない関係性を構築する》《その人らしい生活の流れをつくる》《当たり前と感じる生活を醸成する》《治療から生活に向けた思考転換を促す》《内在する力を見積もり引き出す》《病を抱えつつ自分でできるという自信に働きかける》《生活行動を起点に身体機能の回復を高める》《回復への期待と落胆を推し量る》《現実に見合った方向に希望を修正する》《移り変わる先の道筋を映し出す》《起こりうるリスクを査定し未然に食い止める》の 13 の『高齢者のリロケーションを促進する看護ケア行動』が抽出された。さらに、分析を継続し、構造的に分析した結果、【心地よい場づくり】【生活思考への切り替え】【内包する力の拡張】【希望と現実のすり合わせ】【先を見据えた時間軸】の 5 つの『高齢者のリロケーションを促進する看護介入』が明らかになった。

考察：高齢者のリロケーションを促進する看護介入の特徴として、1) 病から日々の生活に視点を転換すること、2) 時間軸の関係を考慮すること、3) 希望と現実の調整を行うことが示唆された。看護師は高齢者の心地よい居場所を保障しつつ、高齢者自身の力を高めていた。つまり、高齢者のリロケーションを促進する看護介入とは、【心地よい場づくり】を基盤とし【先を見据えた時間軸】と【希望と現実のすり合わせ】を行き来するなかで【生活思考への切り替

え】を図り、場の変化に伴う衝撃を緩やかにすることで、高齢者自身の【内包する力の拡張】に働きかけることであるといえる。

結論：本研究の結果から、高齢者のリロケーションを促進する看護介入の提言として、事前情報の可視化によるリロケーションダメージの最小化、急性期と転院先の看護者間の相互交流の推進、地域に拓かれた医療施設と高齢者の居場所づくりの3つが導かれた。

審査結果の要旨

審査委員会においては、以下の理由により、学術的にも臨床的にも有意義で独創的な研究成果を導いた博士論文として高く評価した。

わが国の医療サービス・福祉サービスは機能分化、在宅医療化及び入院期間の短期化しており、多くの患者が施設から施設への転院を経験している。このような転院は患者に負担と混乱をもたらしている。さらに、高齢者にとっての自宅から施設への入院、施設から自宅への退院もまた、多くの解決すべき課題を抱えながらの移動となっている。渡邊氏は、このような転院・入院・退院に関わる現象をリロケーションという概念から捉え、社会的、臨床的な課題に対して、看護学の視点から問題解決に取り組む研究者である。このような緊急性の高い課題に挑戦していく姿勢を評価する。

渡邊氏は、高齢者の転院に関わる現象に対して、看護学では新しい概念であるリロケーションの視点から、看護者がどのように患者に添いながら支援をしているかを明らかにするという学術的探究に取り組んでいる。複数の概念を比較し、最終的にはDr. MeleisのTransition Theoryを基盤としつつ、理論分析や概念分析を行って、リロケーションの概念を選択していることや、この学問的探究のプロセスを誌上発表したことなど、研究者としての深い探究心が評価できる。

丁寧な面接を行い、現場の看護師から豊かなデータを収集し、分析を行っている。データに向き合う姿勢は粘り強く、データが語りかけてくるものを掬い上げる努力を行っている。その結果として、高齢者のリロケーションを促進する看護行為として30の看護ケア群を抽出し、さらに洗練化し、13の看護ケア行動を抽出している。ひとつの分析結果に到達した後も時間をおき、新しいデータや視点を加味して再分析を行うことを繰り返して、この結果に到っている。この姿勢から、豊かなデータを使用して説得力ある結果を導くことができている。以上のようにデータに向かう姿勢と分析能力によって確かな結果を導いていることも、優れた点として評価できる。

本研究は、高齢者をケアしている看護師の語りから導かれたデータを分析し、13の高齢者のリロケーションを促進する看護ケア行動を抽出したものであるが、保健医療福祉施設で高齢者をケアしている専門職者にとって活用可能な指針となっており、実用性の面からも評価できる。

人生はリロケーションの繰り返しでもあり、看護学の立場から、このようなリロケーションに対して、時空を捉え希望と現実を調整しつつ、生活を再構築していくことの重要性を発信しているとも解釈できる。今後さらに、データを蓄積するなど、研究者としても弛むことなく前進していくことを期待している。